

地域医療における 医療資源・交通インフラ適正配分に関する住民意思の解析

奥 健志 ●北海道大学病院 内科II 講師



1. 背景と目的

北海道南部の日高地方は、高い高齢化率、低人口密度、医療機関の点在等の問題から住民の適切な医療サービスへのアクセス(以下、医療アクセス)が困難な道内の代表的地域である。申請者の所属講座が医師派遣の重点地区として、いる浦河町はその日高町の代表的自治体で、人口約1万(約18人/km²)、総合病院施設を有するが全ての科において十分な専門医療を提供できるわけではない。

一方、125km離れた苫小牧市は、人口20万人弱(約880人/km²)の胆振・日高地方の中心都市で日高地方の救急診療の最終引き受け地であり、浦河町から2時間かけて重症患者が救急搬送される状況も時に見受けられる。これはGolden Timeがある疾患を中心に迅速対応が求められる救急医療では問題であり、典型的な医療へのアクセス不良状況と言える。

また、隣接する胆振地区の中心都市である苫小牧市との間の公共交通機関の整備は乏しく、例えば浦河町からであればバスを乗り換えるため最短4時間かかり、これは175km離れた浦河札幌間の直通バスの乗車時間と同じである。つまり救急医療では苫小牧市との連携が必要な一方、重症・慢性疾患患者の定期診療提携が難しいという日高地区の苫小牧との歪な診療連携を表している。

さらには苫小牧市自体も東西に長大(40km)な地域特性と高い高齢化率(25%)から一部にアクセス不良地域を有し、医療へのアクセス不良は北海道の広範な地域における共通の問題点である。

しかし、それを明確に示し、医療アクセス改善に対する予算の追加支出に対する住民の意思

要旨

北海道日高地方は、高い高齢化率と低い人口密度を背景に、医療機関が点在する典型的な医療過疎地域である。良好でない交通アクセスのため住民の受診行動は制限されている。また、日高地方の中心都市である浦河町や新ひだか町は、救急医療の最終引き受け地として隣接する胆振地方の苫小牧市へ患者搬送することがしばしばある。しかし、100kmを超える長距離移動であることや乏しい公共交通機関のため、継続的な受診が困難である。こういった医療施設へアクセスするための交通網の改善も、医療資源自体の補強や改善とともに重要な医療上の課題である。

そこで今回、浦河町・新ひだか町において住民に医療アクセス問題に関するアンケート調査を行い、コンジョイント法を用いて解析した。その結果、それぞれの地域における医療・交通問題に関する住民意識が浮き彫りにされた。今後は本結果をそれぞれの自治体にフィードバックし、包括的な地域医療の改善計画に寄与させる。

表1 コンジョイント法解析(例)

A案	日案	
町内に救急施設ができる (脳卒中や心筋梗塞)	1時間くらいのところに 救急施設ができる (脳卒中や心筋梗塞)	今のまま
苫小牧までの通院バスが できる(2時間)	苫小牧までの通院バスが できる(4時間)	
町内循環バスはない	浦河町内循環バスができる	
10,000円/月・人支払う	5,000円/月・人支払う	

や支出に対する行政の判断材料たりうる基礎資料が不足している。そこで、日高地区を中心に住民の医療アクセスの現況とその改善に対する支払い意思を解析する事を目的に住民アンケート調査を去る2019年10月に行った。

2. 計画

コンジョイント法を用い住民対面アンケートを行った。コンジョイント法とは、現況と比較した架空の政策採択時の社会状況との間で、住民の選好を順位付けするものである。

今回は、域内(町内)のバス網の整備、苫小牧市との間の直通バスの設置などの交通インフラの改善・整備と専門医の増派、医療施設の新設・増設などの医療資源の改善などをそれぞれ別項目とした。例えば、域内バス網が整備されているが、苫小牧との直通バスはなく、専門医は増派された場合…などという、それぞれの設定をまた別の設定と比べ、目の前で3つの選択肢(2つの新たな社会状況の選択肢と現行のまま、の3択)から1位、2位、3位と順位を付けていく。

これによって、数十例程度の住民アンケートからでも統計解析に耐えうるデータが得られるとされている。この際に重要なのは住民の支払い意思を聴取することで、今回も毎月の支払いコストとして、一人当たり1,000円～8,000円のコストをランダムに解析に組み入れた。表1に例を示している。これとともに一般的な医療環境に対する意識調査も行った。

3. 結果

我々は50例を目標としたが、結果として77例から聴取することができた。一般的な意識調査から、受診に関する問題点として、第1位「行きたい科が近くにない」、第3位「遠い」などのように医療機関への物理的アクセスが不良であることを住民も意識していることがわかった。実際、平均的受診時間として15分以内と答えた住民は約半数であり、120分以上かけて受診をすると

図1 受診に関して問題と思うことを3つ選んで下さい(一番問題だと思う2は2点)

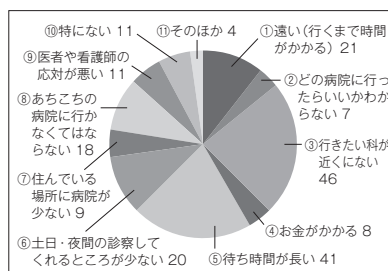
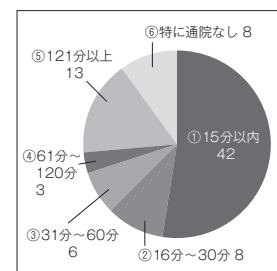


図2 平均の片道通院時間はどれくらいでしょうか?



いう方も少なからずいた(図1、図2)。

また、コンジョイント解析の結果、浦河・新ひだか町においても域内に高度な先進病院を整備することや専門医を揃えることを住民は選択しなかった。これは限られた財政規模では現実的でない、との判断が働いたと考えられた。浦河では、毎月のコストが4,000円/人程度までは現状変化のため許容しうる、という結果が出た。

また、町内・域内の一般診療におけるアクセス改善には消極的だが、高度な医療施設・技術を有する総合病院(すなわち苫小牧市の総合病院)への直通バスの整備と救急病院への搬送時間短縮への希望が強かった。一方、新ひだか町は、苫小牧市に比較的近く、現時点でも同市への交通アクセスがそれほど悪くない。それもあってか、毎月のコスト増で容認するのは2,000円/人までであった。新ひだか町において希望が強かったのは救急病院への搬送時間を短縮する、という項目であった。

4. 結論と今後の展望

浦河町を中心に、高度の負担を伴っても医療アクセスを改善する希望が確認できた。今後は、各自治体と協力して、より具体的な内容での住民調査を進め、浦河—苫小牧間直通バスの運行を中心に現状の改善を進めていく。この研究については北海道新聞、苫小牧民報で大きく取り上げていただいた。

最後に、このような研究を行う機会を与えていただいた杉浦記念財団に深謝いたします。ありがとうございました。